

[書評論文]

Jonathan Culpeper and Michael Haugh,  
*Pragmatics and the English Language*  
(Perspectives on the English Language)

Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2014, xiv + 301.  
ISBN987-0-230-55173-2

権名美智  
法政大学

## 1. 本書の概要と特徴

ジョナサン・カルペパーとマイケル・ホーの共著『語用論と英語』(*Pragmatics and the English Language*)は、英語学の教科書シリーズ「英語の展望」(*Perspectives on the English Language*)の第二弾として刊行された。読者として想定されているのは、英語学の基礎知識のある学生や、語用論に初めて接する研究者である。若い読者が正しく理解し、研究に応用できるよう、語用論の基礎知識から最前線のトピックにいたるまで、選りすぐりの例文と理論を織り交ぜて、明快にわかりやすく書かれている。徹底したデータ重視の経験論的視点で書かれており、話し手の意図・コンテキスト・聞き手の解釈が相まって、発話の意味がインタラクシオンのダイナミズムの中で統合されていく過程を分析し記述した統合的語用論integrated pragmaticsの入門解説書である。16世紀に300万人しかいなかった英語母語話者は、今や3億人、第二言語話者も3億人、外国語としての話者はさらに多く、英語は世界共通語としてのステータスを確立し、Englishesと複数形で表記されるようになった。本書が目指すのは、多様な文化をもつ国・地域で話されている様々な英語の語用論(*Pragmatics of Englishes*)である。

本書の醍醐味は、「スピーチアクト」、「インプリカチャー」といった入門書の定番メニューから「情報語用論」「メタ語用論」といった上級者向けのトピックまでを扱う守備範囲の広さ、英語内・英語間のバリエーションや理論的詳細を論じる囲み記事、そして日常会話、漫画、映画から文学作品まで硬軟取り混ぜた例文のバラエティーにある。思わずニヤリとしてしまう学生の会話から臨場感あふれる救助依頼の電話まで、解説の間に挿入された例文の面白みは、他に類を見ない。鮮度の高いジョーク、定説に対する批判的読解と新提案、読者への働きかけ、カルペパーの講義を彷彿とさせる語り口によって、このテキ

ストはそれ自体が、読解の過程で様々な語用論的相互作用が起きるように仕組みられている。そのように野心的な構成でありながら、英語語用論の法則は他の多くの言語にも当てはまる普遍的法則だという誤った印象を与える論じ方を避けたいと言う著者の謙虚さは、英語母語話者でない読者には好ましく響く。

本書の序論にもある通り、語用論という研究領域は必ずしも一枚岩ではない。「英米圏 vs. 欧州」、「ミクロ vs. マクロ」、「狭義 vs. 広義」などの二項対立からは、語用論が内包する二つの方向性が見えてくる。英米文化圏の語用論はミクロの視点、分析者の視点から見た狭義の語用論で、あくまでも言語学の一分野である。一方、欧州文化圏の語用論はマクロの視点、分析者と会話者両方の視点をもつ広義の語用論で、言語学内に留まらず、文化的・社会的要素を含めた発話の語用論的機能を探ろうとする。本書が取るのはその中道で、両極を橋渡しするスタンスで書かれている。

本書は9章から成る。以下の目次が示す通り、馴染み深い言語学的タームと語用論的タームのインターフェイスを想起させるタイトルが並んでいる。

〈目次〉

- 1: Introduction, 2: Referential Pragmatics, 3: Informational Pragmatics,
- 4: Pragmatic Meaning I, 5: Pragmatic Meaning II, 6: Pragmatic Acts,
- 7: Interpersonal Pragmatics, 8: Metapragmatics, 9: Conclusion

## 2. 論考の検討

本稿では、語用論入門書としては目新しい標題のついた3章：情報語用論、6章：語用論的行為、7章：人間関係語用論、8章：メタ語用論を取り上げて、検討したい。

### 2.1. 情報語用論

ここで扱われているのは、「テキスト・レトリック」、あるいは「談話語用論」と呼ばれる領域で、発話の構成と伝わる語用論的意味・機能との関係が論じられている。発話のメッセージは発話の構成要素の単なる総和ではないとし、それ以上の意味が生じるメカニズムを解明するには、発話の構成要素、その配列方法や発話内での位置が重要だとしている。ここでは、情報理論、ゲシュタルト心理学、スキーマ理論、前景化理論など、テキスト理論、認知科学、文体論等で使われる理論や概念が、語用論的意味・機能の統合過程を説明するために取り込まれていく。

発話を理解する際、聞き手は発話の言語情報によって特定のスキーマを活性化し、そのスキーマのデフォルト情報を補って先を予測しながら一定の解釈に至る。その過程では、連想的な推論、「スキーマ」に基づいた推論、旧情報、前提、テキストの一貫性、予測が

重要な役割を果たすにもかかわらず、語用論においては、そうした要素が認知科学においてほど重要視されていないというのが著者の見解である。

ある言語情報が引き金となって対話者の共通基盤から情報が引き出されて、発話の解釈に重要な役割を果たすのが「前提」である。著者は、前提は対話者が共有する共通基盤から引き出されるという定説に異議を唱える。共通基盤は常に所与のものとは限らないし、談話進行中对話者が交渉しながら積極的に作り上げる場合もあるという見解を、消防署への緊急連絡の通話例を解説しながら提示している。出動要請を受けた救急センターの職員がイギリスの平均的な住宅事情のスキーマを活性化させ、煙にまかれてパニックに陥った通報者から得られる途切れ途切れの情報を基に共通基盤を作ることによって状況を正確に掴み、現場の通報者に適切な応急処置の指示をしながら救出作戦を練る通話記録の分析と説明は、スキーマによる情報だけでは十分に共通基盤はできないことを読者に納得させる力を十分にもっている。

## 2.2. 語用論的行為

6章の主たる目的は、オースティン、サールから現在に至るまでのスピーチアクト理論の重要な概念を概説し、その理論の限界を指摘し、新しい提案をすることにある。スピーチアクトに関する限り、内容的には、他の語用論テキストとそれほど異なる点はないが、本章の面白さは、そうしたスタンダードな内容を超えたところにある。また、英語から始まったスピーチアクト理論は普遍的で、他の言語にも応用可能だという英米文化圏研究者の標準的スタンスから少し距離をおき、批判的視線を投げかけている点も興味深い。その現れのひとつが、スピーチアクト理論を応用した Blum-Kulka et al. (1989) の Cross-cultural Speech Act Realisation Project をスピーチアクト理論の応用研究の最も重要な試みとして高く評価しながらも、批判している点である。これは「依頼」というスピーチアクトの直接性・間接性を、談話完成法を使って多言語で大規模に行った研究プロジェクトで、スピーチアクトや異文化間コミュニケーションを扱う研究者が必ず参照する重要な研究である。

著者は、このプロジェクトの興味深い点は、依頼の直接・間接性の体系化の仕方にあるとし、依頼の間接表現が英語以外の言語でも効果的に使われていることが判明したことは重要であると高く評価している。とくに貢献度が高いのは、スピーチアクトの間接性を広く捉える視点だとしている。ブラム-カルカは、主要行為・<sup>head act</sup>注意喚起・<sup>alerter</sup>支持的展開に注目しているが、この三要素は順不同で使われることがあるし、一つだけでも発話内力を間接的に発揮する。しかし、彼女自身も、この研究に影響を受けた後の研究者も、主要行為に注目するあまり、そうした可能性に言及していない点が惜まれるというのが、このプロジェクトに対する著者の評価である。

本章では、間接的発話行為がスピーチアクトとして成立するためにはグライスの会話の

インプリカチャーや適切性条件等が関連していることが指摘され、解説されている。この事象に限ったことではないが、このように他の語用論テキストでは別項目で扱われる事項が有機的に関連づけられていく書き方が、本書の特徴と言える。発話は辞書通りの意味だけでなく複層的な意味合いや機能を負っているため、話し手・聞き手・コンテキストによって、様々に解釈され得るとというのが語用論の主張だとすると、このようにいくつかの概念の重なりを意識しつつ、少しずつずらしながら複層的に論じていく本書の書き方は、まさに語用論的解釈の実践と言える。

Mey (2001, 2010) はスピーチアクトに対応して「語用論的行為理論」という概念を提唱し、語用論的行為の最小単位として「語用論行為素」(pragmeme) という用語を提案している。一方、本書では、「依頼」を例に、スキーマ理論と適切性条件の視点を兼ね備えた語用論的行為の「プロトタイプ理論」を作ってはどうかという提案がなされている。スキーマ理論で典型例がデフォルトとして想定されているように、形式的特徴、文脈的信念、人間関係的信念、共テキストの特徴、結果に注目して、スピーチアクトのプロトタイプをデフォルトとして想定すれば、これまで見えなかった要素が見えてくるのではないかというのである。

オースティンに始まり、サールで発展したスピーチアクト理論は、語用論において最も重要な理論の一つである。この理論は、英語の遂行動詞を基に作られた理論であるにもかかわらず、これまで長い間、経験論的な研究に基づく詳しい検証がなされないまま、その普遍性と汎用性が信じられてきた。しかし、実際に英語以外の言語・文化圏でのスピーチアクト研究が広く行われるようになると、この理論では説明しきれない事例が多く報告されるようになった。同時に、サール自身が使っていたグライスの推論だけでは説明しきれず、社会・文化的コンテキストを考慮に入れた連想的推論の果たす役割が重要だという点も指摘されるようになった。そうした異文化におけるスピーチアクトもきちんと説明できる新しい理論、つまり対話者の両方に注目し、分析の焦点となるスピーチアクトの前後に連なる言語活動も視野に入れた理論が必要だという見解は、欧米の言語から遠く、間接性が重んじられる言語を母語とする日本人言語学者には共感できる点が多い。

### 2.3. 人間関係語用論

7章の中心テーマはポライトネスである。前半ではグライスの会話の格律に基づいた Leech (1983) や、フェイス保持に基づいた Brown and Levinson (1987) (以下 B & L) によるポライトネス理論が概説されており、後半ではポライトネス研究における新しい発展状況が論じられている。ここでは、従来のポライトネス理論のどこに著者が批判の目を向けているのか、今後の新展開について著者はどう考えているのか、この二点に注目して概説していきたい。

B & L によるポライトネス理論はゴフマンのフェイスという概念に基づいている。ゴ

フマンのフェイスの概念では、自己イメージは他人が自分を見るイメージに依存し、相互に反映し合うものとされていたが、B & Lのフェイスの概念では、他者の視点が削ぎ落とされ、自己イメージの保持という個人的欲求に還元されている。最近のポライトネス研究では、ゴフマンのフェイスの概念に立ち戻り、相互反映性を取り戻そうというアプローチが見られる。また、B & Lのポライトネス理論の普遍性と、他言語・他文化への汎用性についても批判されている。彼らの定義は英米文化圏の個人主義的な考え方を反映したもので、集団主義を重んじる文化をもつ中国や日本の事例には馴染みにくく、普遍的とは言いがたいとしている。これは、ポライトネスは個人だけでなく集団にも向けられるという解釈に基づいた見解である。

多くの批判を浴びながらも、B & Lのポライトネス理論に取って代わる理論は未だ出現していない。その代わりに出てきたのが、部分的に重なる談話的、関係的、フレーム依拠的な三つのアプローチである。談話的アプローチは、談話のポライトネスを判断するのは分析者ではなく会話者であり、その判断は言語形式によってではなく、文脈や会話者の視点、社会規範によって決まるとしている。関係的アプローチは、個人によるポライトネスの実践ではなく、一般的な人間関係に焦点を当てたもので、コミュニケーションにおいて人は常に人間関係を交渉しているという考え方である。また Watts (2005) は、「ポリテック対ノンポリテック」、「有標 vs. 無標」という二項対立を設定し、そのコンベネーションで人間の言語行動を分類している。ポライトな言動には適切な度合いがあり、単にポライトであればよいというわけではない。度を超すとオーバーポライトとみなされ、インポライトと共に「ノンポリテックでネガティブな有標行動」と解釈される点は、日本の「慇懃無礼」と同じ考え方である。一方、Spencer-Oatey (2002) は、B & Lのポライトネス理論に代わるものとして、人々の間に調和・不調和をもたらす「ラポール操作モデル」を提案している。言語データを詳細に分析できるモデルとして著者は高く評価しているが、評者が知る限り、このモデルを使った研究はほとんどなされていない。

フレーム依拠モデルは、認知的フレームを使ってポライトネス現象を解明しようとするアプローチである。その最も綿密なモデルとしては、Terkourafi (2001) が例に挙げられている。このモデルによると、ある特定の言語表現がこれまでどういう場面で使われてきたか、その共起状況を調べれば、その表現のデフォルトがわかるとしている。つまり、その表現が定期的に起こり、受容されていれば、ポライトな行動を表す慣例と考えられるということである。

ポライトネス研究と並んで最近注目されているのが、Culpeper (1996) の「インポライトネスの解剖学に向けて」が起爆剤となったインポライトネス研究である。ここで重要なのは、インポライトネスをポライトネスの反対概念と捉えてポライトネス理論で説明できると考えるのか、異なるモデルが必要なのかという問題である。Culpeper (2011) はイギリス人大学生がインポライトと見なす 100 件の事例を調べ、6 グループ（恩着せがましい

態度、無配慮、無礼、攻撃的、不適切、感情を害するもの)に分類した。実際、これらのインポライトなものと同になるポライトな概念があるかということ、必ずしも簡単にはみつからない。「無配慮」vs.「配慮ある」、「不適切」vs.「適切」、「攻撃的」vs.「協調的」はよいとしても、「恩着せがましい」の反対が何なのかはよくわからない。また、インポライトな言動に出合ったときに感じる「怒り」と反対の感情が何なのかもわからない、と著者は述べている。

とくに難しいのが、仲の良い友人間で使われる侮辱的表現、「からかい」の扱い方である。B & Lの理論ではこうした「疑似インポライトネス」は扱えないが、Leech (1983)の理論では「からかいの原則」(Banter Principle)が設定しており、扱うことができる。リーチの説明では、親愛の情を示すために「明らかに本当でない事」や「明らかに聞き手にとってインポライトなこと」を言うことによって話し手が本当に伝えたいのは、「聞き手にとってポライトで真であること」とされている。

そこで問題となるのが相互作用的アプローチである。ここには3つの問題がある。一つ目は、ポライトネス研究で分析されるのは、話者、聞き手、分析者のうち、誰の考えによる(イン)ポライトネスかという問題である。二つ目は、会話者と分析者は、どのようなモラルに則ってポライト/疑似ポライト/インポライトの判断を下すのかという問題である。三つ目は、分析者はどのようにポライトネス/インポライトネスの評価基準を作り上げるのかという問題である。分析者は、「言われたこと」だけでなく、「どのように言われたのか」、つまり音韻的、非言語的な特徴も分析して、インタラクションの間におこるダイナミズムを捉える必要があり、そのためには、メタ語用論的な視点を持つべきだというのが、著者の考え方である。

ポライトネスに関して著者が強調したい点は、フェイスという概念でポライトネス関連事象がすべて説明できるわけではないということ、また、ポライトネスを正しく分析するためには、人はどう扱われるべきだとその社会的組織が考えているのかを考慮に入れる必要があるということである。また、言語形式とそれが発揮する語用論的・ポライトネス機能は必ずしも固定しているわけではないので、言語だけを見てもポライトネスの判断はできない。したがって、談話全体の流れのダイナミズムのなかで語用論的機能を捉える必要があるというのが、本書で繰り返される見解である。それに加えて、誰の視点からポライトネスを分析するのかという問題も重要で、会話者の立場によって解釈が異なる可能性があることを分析者は意識しておくべきだとしている。

リーチのポライトネス戦略を反転させたインポライトネス戦略で一躍注目を浴びたカルペパーが、インポライトネスの研究を進めた結果、インポライトネスをポライトネスの反対概念として捉えることはできないという見解に達したことは興味深い。インポライトネスは、礼儀を重んじるイギリスで人気のある研究テーマの一つだが、日本ではあまりなされていない。日本も同様に礼儀を重んじる国なので、日本人研究者がインポライトネス研

究に携れば、深い洞察が得られるだろうし、多くの貢献ができるのではないだろうか。また、日本語の敬語研究はポライトネス理論が大いに関係すると考えられるし、盛んに行われているにもかかわらず、研究成果のほとんどが日本語で発表されているため、海外で認知される機会が少ないことも惜しまれる点である。

#### 2.4. メタ語用論

言語意識には再帰性がある。自分が発話をどう解釈するかを意識するのは、他の人がその発話をどう解釈するのかを意識しているからである。私たちは言語を使って何らかのメッセージを伝えようとするが、そのメッセージの伝わり方に問題が生じたとき、私たちはコミュニケーションの内容ではなく、伝達状況そのものに言及するために言語を使用する。言語使用について言語を使用すること、それがメタレベルの言語使用であり、そこに焦点を当てるのがメタ語用論である。

「メタ語用論」という用語を作ったのは言語人類学者の Silverstein (1976, 1993) である。彼はヤコブソンの「言語のメタ言語的機能」からアイデアを得たとしながら、少し視野を広げて、言語使用者が言語形式とコンテクストの関係を認識するようにしむける意識だと定義している。

メタ語用論的意識を表現する形式には、大きく4つのタイプ（語用論標識、伝達的言語使用、メタ語用論的コメント、社会的談話）があり、それぞれ下位分類がなされている。語用論標識を例にとると、さらに談話標識、文副詞、ヘッジ、再帰表現、間テクニクの接続等に分類されている。基本的な語用論研究においては、特定の言語形式に注目してデータを収集、語用論的機能を探る「形式-機能の対応づけ」という研究方法が確立している。方法が明確で実践しやすいため、語用論研究の人気ランキングの上位を占めるテーマで、多くの研究者がこのアプローチで研究を行い、常に新しい研究成果が報告されている。多くの研究者が集中するため、タームや分類が研究者によって異なるという弊害はあるものの、未開拓の領域も多く、貢献できる余地もまだ残されている。

メタ認識的意識とは、会話者にとっての新情報・旧情報の識別、情報への確信度に言及する言語に注目することである。言語学の論文の常だが、定義が難しい時は具体例を見た方がわかりやすい。ここで取り上げられているのは *oh*, *yet*, *actually* などの語で、*oh* は聞き手にとって新情報であることを示す印だといった説明がなされている。談話標識の研究と重なる部分もあるが、それらの語が果たす認知的ステータス（例：「既知/未知」、「期待度」等）を検討する視点から分析をする分野である。この章では、この他にも、アイロニーの込められた談話を語用論的に分析して、命題を何層にも取り巻く「メタ表象的意識」や、発話においてどのように聞き手の理解が意識されているのかという発話の意味を「個人-言語共同体-社会」という異なった層で捉えようとする「メタコミュニケーション意識」が扱われている。

### 3. これからの「語用論」のために

本書は語用論の入門書の体裁をとっているが、入門書以上の内容を含んでいる。想定された読者層は英語学の基礎を学んだ学生や若手研究者だと書かれていたが、これまで語用論研究を実践してきた研究者のための本とも言える。これまでの自分の研究のポジション、語用論研究内での位置を見極め、今後の研究方針を見直し、新しい方向性を探るための指南書として利用できるからだ。

また、カルペパーとホーが本書で見せてくれたことの 하나가、批判的読解の方法と実践である。キャンノンと呼べる規範的理論であっても、批判的読解によって見直しや修正をすれば、新しい研究の方向性が見えてくるということである。また、世界の英語 (Englishes) や異言語・異文化に積極的に取り組もうという提案や英語至上主義への批判が、英語学研究の中心的位置を占める研究者から出てきたことは、とりわけ重要である。ローカルな言語の語用論研究での発見を語用論の中心的理論に還元し、修正を施していけば、理論の普遍性をさらに高めることができるという意味では、どんなマイナーな言語であれ、どんな言語現象であれ、研究する価値があるということなのである。

また、本書の特徴は、この本が読者とインタラクションをしようとしている点にある。本書は、いたるところでインタラクションのダイナミズムを誘引している。著者が読者に望んでいるのは、語用論の知識を獲得することに留まらない。読者が自分の研究に立ち戻ったときに、自分のデータ分析への姿勢や論じる言語を意識化するようになることも、おそらく本書の狙いの一つなのだろう。これが、これまでのミクロな視点からの語用論研究を、メタレベルで捉え直すマクロな視点を得るということなのかもしれない。そういう意味で本書は、読者に語用論の理論・ターム・内容をきちんと整理して教えようとする教科書性と、語用論研究者としての立ち位置の確認と研究姿勢の見直しを促し、語用論研究の学際性への意識を高めてくれる指南書性の両方を兼ね備えた本だと言える。

本書には、ふつうの語用論教科書では扱われない事象を論じているという著者の自負が随所に見られる。たしかに、語用論では目新しい事柄が論じられているかもしれないが、内容的には文体論や認知言語学などの隣接分野で使われてきた理論的枠組である。著者自身、語用論以外に、文体論、英語史研究、コーパス言語学にも携わっているので、著者自身の領域横断的な研究手法が語用論研究に還元された結果ではないだろうか。発話の解釈に多くの事柄が関連していることが実感できる書き方は利点とも言えるが、関連事項が多すぎて、解説が縦横に膨らみ、複雑になりすぎているきらいがあることは否めない。とくに、8章のカテゴリー名は目新しいが、これまで行われてきた幅広い語用論研究をメタレベルで再分類・再命名したということではないだろうか。もちろん、再命名によって認知言語学や情報理論などの新しい視点や知見が加わっていることは言うまでもないが。

最後に、例と囲み記事が読み物として面白かったことを付け加えておきたい。本論部分



に収まりきれない内容、英語バラエティー間の相違など、今後の研究テーマへのヒントになる興味深いタイトルがズラリと並んでいる。順不同に読める自己完結的な内容になっており、読者を飽きさせない専門書の工夫として評価できる。

#### 参考文献

- Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blum-Kulka, S., J. House and G. Kasper (eds.) 1989. *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*, Vol. XXXI. *Advances in Discourse Processes*. Norwood, NJ: Ablex.
- Culpeper, J. 1996. "Towards an Anatomy of Impoliteness". *Journal of Pragmatics*, 25: 349-367.
- Culpeper, J. 2011. *Impoliteness: Using Language to Cause Offence*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics*, London: Longman.
- Mey, J. 2001. *Pragmatics. An Introduction* (2nd edn). Oxford: Blackwell.
- Mey, J. 2010. Societal pragmatics. In Cummings, L. (ed.) *The Pragmatics Encyclopedia*, London and New York: Routledge, 444-446.
- Silverstein, M. 1976. "Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description". In Keith H. B. and H. A. Selby (eds.) *Meaning and Anthropology*. Albuquerque: The University of New Mexico Press, 11-56.
- Silverstein, M. 1993. "Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function". In John, A. L. (ed.) *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press, 33-58.
- Spencer-Oatey, H. 2002. "Managing Rapport in Talk: Using Rapport Sensitive Incidents to Explore the Motivational Concerns Underlying the Management of Relations". *Journal of Pragmatics*, 34 (5): 529-545.
- Terkourafi, M. 2001. *Politeness in Cypriot Greek: A Frame-Based Approach*. Unpublished PhD Dissertation. Cambridge: University of Cambridge.
- Watts, R. J. 2005. "Linguistic Politeness Research: *Quo vadis?*" In Watts, R. J., S. Ide and K. Ehlich (eds.) *Politeness in Language: Studies in Its History, Theory and Practice* (2nd edn). Berlin and New York: De Gruyter Mouton, xi-xlvii.